

# し えん 便 り

3月第1号



2021年。新しい年が明けて二ヶ月が過ぎました。

新型コロナウイルスの感染拡大によって自粛を強いられる生活が続きますが、子どもたちは春の扉にそっと手を掛け、溢れかえる命の息吹をその肌を感じていることでしょう。

しえん便りでは今回と次回の2回に分け「教育相談の窓から」として、安心感を幹に横への発達を広げていったA君と、寄り添い応援したお母さんの子育ての実践を報告させていただきます。

## 教育相談の窓から～“安心感からはじまる成長”Ⅰ

本校コーディネーター 中井 聖也



慣れた場所でも、人前に出ると、緊張感が高くなり、動けなくなるA君のお母さんから学んだことをまとめます。

### \* 不安感の強いA君 「どうしよう～」

A君は、自分で歩けるのですが、外での移動では、いつもお母さんに抱っこを求めて、自分で歩けませんでした。また、家のトイレ以外利用できず、保育所ではずっと我慢している。そんなA君に対して、お母さんは、「小学校へ歩いて登校して欲しい。」「小学校のトイレを使えるようになって欲しい。」そういった願いを持っていました。

A君は、「不安感の強さ」が様々な行動のやりにくさに繋がっていたと思われそうですが、お母さんは「～しなさい」といった指示的な声かけをするのではなく、本人が「やってみたくなる」ような声かけや働きかけをずっとしていました。そのため、お母さんの存在がA君にとっての「不安さから逃れられる安全な場所」だったのでしょう。だから、不安な場所では、お母さんを求めたのだと思います。その結果、お母さんに抱っこされることで、外の世界に出て行け、家のトイレなら安心して使えたのでしょう。

### \* 安心感が成長の原動力 「やってみようかな～」

お母さんは、A君が「小学生になる」という気持ちをもちはじめたのを機会に、「小学生になったら歩いて通学しよう」と提案していました。A君も、A君のお兄ちゃんが歩いて小学校に通っていることを見ていることもあり、「入学したら歩いて行く」という決意を話し始めていたそうです。入学後、お母さんは、A君と通学の道のりを一緒に歩いていくことにしました。またA君との話し合いの上で、ついていく距離を50cmずつ少なくする取り組みを行ってくれました。その後、50cmにこだわらずに、A君が、

どこまでお母さんについて行ってもらいたいかを考えてもらうようにしたところ、お母さんのついて行く距離がどんどん短くなり、今は、玄関から兄と二人で歩いて登校しているということです。

A君が「歩いて通えるようになりたい」という自分の成長を願う気持ちが出た時に、「歩いて通う」という提案をしたこと、その提案を、本人が「不安だけど、頑張ってみたい」というしっかり葛藤することができる時間的な余裕を考えながらしていること。そして、入学後、「約束だったでしょ、今日から一人で行きなさい」という、働きかけでなく、本人の不安感に寄り添う姿勢で、本人の納得を優先させて、「50cm」ずつ、一緒に登校する距離を縮めていったお母さんの取り組みの中で、たくさんの不安を抱えたA君の心の準備も整っていったのだと思います。

そんな細やかな取り組みの中で、お母さんの存在（安心感）という支えがA君の中で大きく育ち、兄と二人きりでも通学できるようになったのでした。

### 周りとは比べない子育て 「あなたはあなた」

トイレについては、保育所の帰りに家まで我慢できない時に、側溝で用を済ませたことから、その場所ですることができるようになりました。また保育所での取り組みから、保育所でのトイレが利用できるようになってきました。A君は家の外でもトイレができるようになってきました。それとともに、はじめは限られた側溝で済ませていたのが、側溝であればどこでも、やってしまうという困った行動が見られるようになったのです。お母さん自身、社会的に考えて「いいのだろうか」と考えたそうですが、「やっと家のトイレ以外の場所が利用できるようになった」A君の状態を考えて、しばらく様子を見ることにしました。入学してから「小学校のトイレは使えるのかなあ」と心配をしていたのですが、入学後、問題なく小学校のトイレをつかえているということです。

今年度の「しえんだより10月号」に「発達には縦の発達（できることが増える）と横の発達（できる場面が増える）」ということについて触れましたが、A君のトイレは、家でできていたことが、「いろいろな場所でお母さんと一緒じゃなくてもできる。」横の発達が伸びてきた結果によるものです。ここで考えたいのが、もし、「トイレは側溝でするモノじゃない」と注意をしていたら、「家以外でトイレをしてはいけない」と思ってしまう。結局家以外のトイレが使えるようになるのはもっと遅くなったでしょう。今のA君の状況を考えたときに、家以外の場所でもトイレができるようになっていると、成長を喜んであげる方がいいのではないかと考えるのです。お母さん自身が、周りとは比べる（トイレはトイレでするモノだ）のではなく、「A君の今の状況（やっと家以外でできるようになった）」を優先的に考えたことで、小学校入学と同時に、小学校のトイレが使えるようになったのだと思います。

次回はA君の友達との関わりについて報告させていただき、自己肯定感について考えたいと思います。



教育相談の窓から～“安心感からはじまる成長”Ⅱ 本校コーディネーター 中井 聖也

### 集団の力が成長に 「いっしょに」



また、保育所での取り組みもあり、友達との関係も良好であったこと。そして2つ上の兄の存在もA君の成長には不可欠だったと思います。

近所の公園や福祉センターに遊びにいていたA君、はじめは、お母さんから全く離れられなかったそうです。しかし、少しずつお母さんが離れて友達と遊べるようになっていきました。あるとき、公園に行きたいといったA君に対して、家の用事をしていたお母さんは、「用事が終わるまで待って」と伝えたそうです。待ちきれなくなったA君は、一人で公園に行ったそうです。それを機会に、少しずつお母さんから離れて行動することができるようになりました。また、家に兄の友達がたくさん遊びに来ていたのを見て「僕も友達を家に呼びたい」とお母さんに相談してきたそうです。それを受けて、保育所で「どんな誘い方をしたらいいか」作戦をお母さんが、A君に伝えていき、実際に誘うことができたということがありました。今はA君が友達の家で一人で行ったり、また、A君の家に友達が来たりして、遊んだり宿題も一緒にしているそうです。

友達と遊びたいという気持ちを育てた、保育所という集団の力、そして、いい模範となった兄の友達関係があり、「もっと友達と遊びたい」という気持ちが、A君の中で育ち、安心感のあるお母さんに「どうしたらいい」という相談をする。その相談にしっかりとお母さんが応えてきた。今の友達関係が充実しているのは、そういった取り組みの成果だと思えます。

### 共感からはじまる子育て 「そうだね～」

さて、いろいろな成長を見てきましたが、その幹の部分には何があったのかを考えたいと思います。それは、A君にとってお母さんが「安心感のもてる場所」であったという一言に尽きると思うのです。不安いっぱいの世界に、一歩踏み出すとき、どうしても安心アイテムが必要となります。「不安だけど頑張ってみよう。けど、うまくいかないかもしれない。けどやってみたい。怖い。」いろいろな葛藤が子どもの中で起こっています。そんなときにA君には、「ほっとできる場所(お母さんの存在)」があるからこそ、不安な場所にも挑めたのだらうと思うのです。なぜ、お母さんが安心できる場所になったのか、それは、お母さんが、A君の気持ちに寄り添うことを最優先に考えて、A君のペースでの成長ができればと関わってこられていたこと、また、頑張りたいことも、A君が自分から頑張りを始められるように、十分時間に余裕を持って言葉がけをして、頑張るペースをA君と相談して決めるなどしてきたこと、そして、頑張りの結果が世間で考えるものには、届かないものであってもA君を責めることなく、本人なりに頑張っているところを認めて言葉がけをされていたことなど、A君への「共感」を大切にされた「子育てをされ

てきたからだと思います。



### 自己肯定感を太らせる 「うん、だいじょうぶ」

A君が小学校に入学してからも、どんどん成長しているという報告を聞く中で、この成長は、お母さんの時間がかかっても「共感」から始まる子育てを続けた結果、A君の自己肯定感が育ってきたことによるものだと思います。

自己肯定感という言葉について、高垣忠一郎氏は「自分が自分であって大丈夫」という気持ちであること、そのままの自分が許される安心感を持つことが、その気持ちを育てる上で大切だと言われています。また、子ども自らが試行錯誤する中で、そして、失敗しても許され「大丈夫」と感じることから自己肯定感は生まれるということ。そして、子どもを見るときは、「共感の目」（「子供の目に世界がどのようにどのように映っているか、どう感じられているか」を見てみよう。感じてみようとする目）と「評価の目」（「子どもが人間として大切な力をしっかり身に付けながら、育ってきているかどうか」を客観的に冷静に評価しようとする目）の2つの目で見ることの大切さも述べられています。

お母さんの話を聞き、A君の成長を見ると、A君とお母さんの信頼関係、そしてA君自身の自己肯定感は、とても強い物になっているだろうと感じました。今後も思春期の波などいろいろな荒波が来ても、お母さんの寄り添う姿勢で、A君自身が、しっかりと乗り越え、大きく成長していけるだろうと感じました。また、自分が子どもを見るときに、お母さんのように「共感の目」が開いているのか、反省させていただきました。 参考文献 高垣忠一郎（2004. 7）「生きることと自己肯定感」（新日本出版社）

## できないことの意味～A君とお母さんの実践に学ぶ

「抱っこしないと外出できないA君」、「お家以外のトイレを使えないA君」  
この「～できないA君」を「～できるA君」に置き換えるのでしょうか。  
すると、「抱っこされると外出できるA君」、「お家のトイレを使えるA君」とA君の  
発達の力が見えてきます。この力こそより大きな自分になりたいA君の自己決定

子どもが自分で考え、自分で選択する“自己決定、自主選択”は、基本的な  
子どもの権利として、生活や教育の場で最大限尊重されなければなりません。  
は、たちを“より大きな自分へ”と突き動かす自我。その発達を育む  
は、生活の主体者となりゆく子どもたちが、さまざまな  
矛盾や葛藤と向き合い、自ら決めるものでなければなりません。

A君の外出時の抱っこも、お家以外のトイレを使わないのも彼の自主決定でした。  
お母さんの子育ては、A君の決定を尊重し、A君の次の一步を応援し、A君の  
“大きくなりたい”気持を動かし、A君の新しい自主決定を促してきました。

お母さんと話し合っただけで決めた“50cmずつ”はA君が新しい自分に向かえる  
確かな距離だったのでしょ。

集団の中で響き合い、たくましく本物になっていく自主選択、自己決定。  
私たちもコーディネーターも様々な相談活動にあたり、みなさんと一緒に  
子どもたち一人一人の“50cm”を見つけていきたいと思ひます。

浦木 隆

「子どもが自分で考え、自分で選択する自主選択、自己決定は、  
」

多くの方はこのことに異論はないと思うのですが、自分で決定できるときに、いつも子どもが主体的であるか、発達の主人公になりえているかは、難しい問題です。

、その上に決して大人は君臨してはならないと思う  
のです。

矛盾や葛藤と向かい合い生活の主体者となりゆく

基本的な子どもの権利として生活や教育の場で最大限尊重されなければなりません。

そう考えると子どもの行動を「～できない」のではなく、「～できる」と捉えることが  
見えてきます。

「一人では外出できない」は「お母さんとならば外出できる」、「外のトイレが使えない」は  
「お家のトイレは使える」・・・周囲と折り合いをつけてより大きな自分になりたい、  
A君の自己決定に間違いはないのです。

子どもの行動の意味を探る上でも重要です。お母さんはそんなA君を  
応援し、どのように大きくなっていかうか提案し、一緒に考えました。

そして新しい自己決定を育んでいきました。

A君の踏み出した“50cm”は次の自分づくりへの大きな一歩だったんですね。

「自己決定を強制していないか。」

このことは私たちは子どもたちとの関わりの中で絶えず自問しなければなりません。  
A君がお母さんとの間で育んだ自主選択、自己決定の力は、保育や教育の場、  
集団の中で響き合い、さらにたくましく“本物”になっていくのでしょうか。

本校の教育相談も子どもを中心に保護者、関係者の方々と一緒に考え

みんなの気持ちが「やってみよう」と動き出すような取り組みになれるよう  
心がけていきたいと思います。

浦木 隆

子どもがその時の状況を取り込み、解決のため自分で考え、自分で選択する、  
そのことを自主決定、自己選択とするならば、A君の外出時の抱っこやトイレへの  
こだわりも彼の自主決定であったとみることができます。

「気持ちが動く」～A君とお母さんの実践から。

子どもが自分で考え、自分で選択するという意味での自主選択、自己決定は、  
基本的な子どもの権利として、生活や教育の場で最大限尊重されなければなりません。  
しかし、大人が子どもの上に君臨するような一方向性の関係の中では、子どもが自分で  
決めたことであっても、ほんとうにそれが主体的な選択であったかはわかりません。

「自己決定を強制していないか。」

子どもたちとの関わりの中で私たちは絶えず自問しなければなりません。  
ほんとうの自己決定を実現させるためには、子どもの「やりたがりの心」を動かし、

「そうしたくてたまらない」雰囲気をつくるのが大切なのではないでしょうか。

お母さんはあらゆる場面でA君に寄り添い、共感し、一緒に考え、その心、雰囲気をつくり上げてきたのだと思うのです。

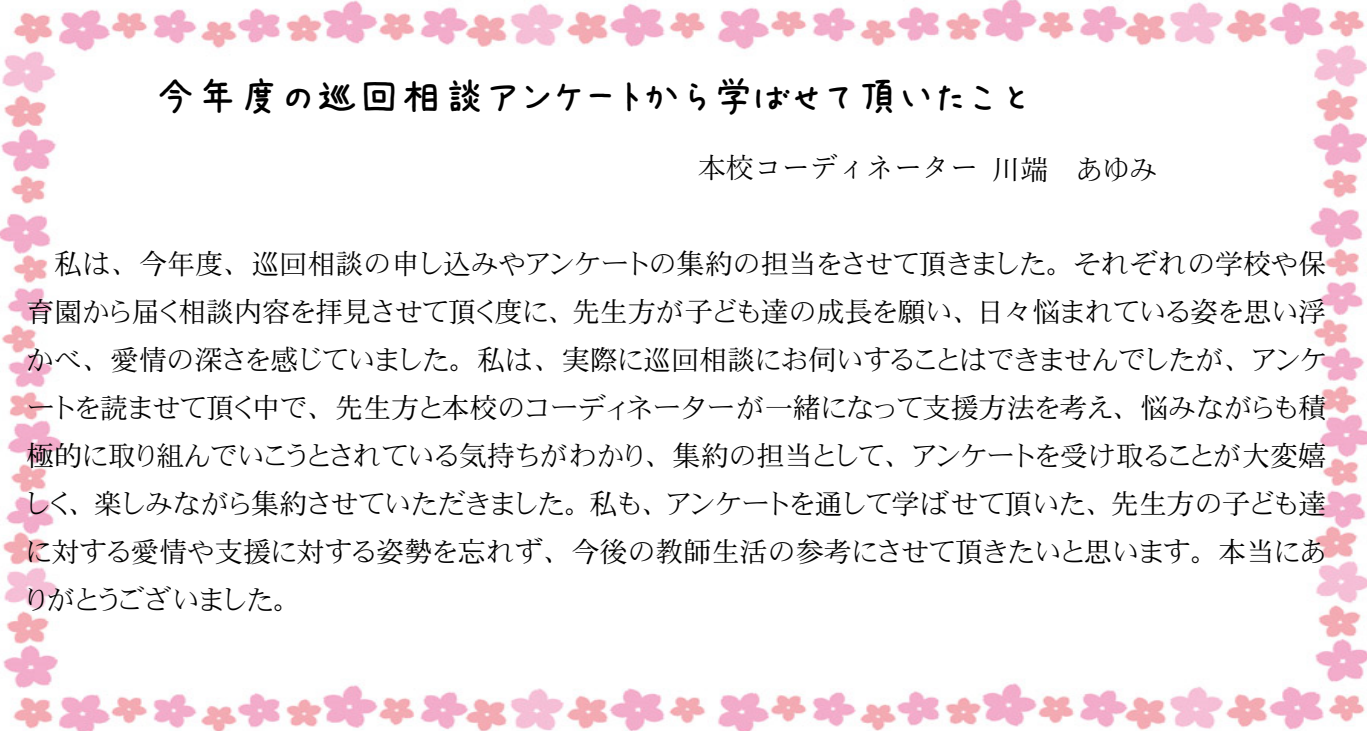
A君がお母さんとの間で着実に育んだ主体性と自我。それに裏打ちされた自主選択、自己決定は、保育や教育の場、集団の中で響き合い、さらにたくましく“本物”になっていくのでしょうか。

本校の教育相談も子どもを中心に保護者、関係者の方々と一緒に考え「やってみよう」とみんなの気持ちが動き出すような取り組みになれるよう心がけていきたいと思えます。

浦木 隆

参考文献：白石正久（2011） 「やわらかい自我のつぼみ」全障研出版部






## 今年度の巡回相談アンケートから学ばせて頂いたこと

本校コーディネーター 川端 あゆみ

私は、今年度、巡回相談の申し込みやアンケートの集約の担当をさせて頂きました。それぞれの学校や保育園から届く相談内容を拝見させて頂く度に、先生方が子ども達の成長を願い、日々悩まれている姿を思い浮かべ、愛情の深さを感じていました。私は、実際に巡回相談にお伺いすることはできませんでしたが、アンケートを読ませて頂く中で、先生方と本校のコーディネーターが一緒になって支援方法を考え、悩みながらも積極的に取り組んでいこうとされている気持ちがわかり、集約の担当として、アンケートを受け取ることが大変嬉しく、楽しみながら集約させていただきました。私も、アンケートを通して学ばせて頂いた、先生方の子ども達に対する愛情や支援に対する姿勢を忘れず、今後の教師生活の参考にさせて頂きたいと思います。本当にありがとうございました。



新しい春、本校コーディネーター望月が、県より優れた教育実践を行い成果を上げていると認められる教職員を対象に贈られるきのくに教育賞を受け、その受賞者の中で特に継続的な実践で成果を上げ、かつ、他の教員の指導力向上に寄与できる者に対して贈られる、「きのくに教育の匠」の称号をいただきました。

この受賞を機にこれからもコーディネーター一同、より一層の研鑽に励み、地域の学校の先生方と特別支援教育の充実に努めたいと思います。

